

## 市民企画講座を募集します

あなたの企画した講座を実施してみませんか? 男女共同参画センターでは、皆さんから応募いただいた市民企画講座を選考し、決定された優秀な企画を9月から翌年2月の間に実施していただきます。力作をお待ちしています。

- 対象 男女共生を考える3人以上のグループ(男女別・市内外在住の別を問いません)
- 内容 男女共生を探る講座(※1企画につき30,000円以内の経費を補助)
- 応募方法 5月21日(月)〈消印有効〉までに、申請書・グループの活動実績等(所定様式)を下記へ
- 選考方法 6月2日(土)午後1時から、企画者によるプレゼンテーションを行い、優秀企画3点以内を決定します。※選考された企画者には、後日連絡します。

問い合わせ 男女共同参画センター ☎38-2023  
(〒659-0092 大原町2-6 ラ・モール芦屋2階)

## 美術博物館の催し

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432(伊勢町12-25)

### 春のアートフリーマーケット

ユニークな活動を展開する約40店が出店し、アーティスト個人の手によるオリジナルな創作作品をフリーマーケットで展示即売します。〈雨天中止〉

- 日時 5月3日(木・祝)・4日(金・祝) 午前10時～午後5時
- 会場 美術博物館前庭(彫刻広場)



### みんなで歌いましょう

展示会の見所の解説を聞き、また、みんなで歌うイベントです。多数ご参加ください。

- 日時 4月20日(金) 午後1時30分～3時
- 会場 美術博物館講義室
- 出演・指導 歌・加藤純子、ピアノ・沖倫子
- 参加費 観覧料および歌集『愛唱名歌』代1,000円

## 谷崎潤一郎記念館の催し

問い合わせ 谷崎潤一郎記念館 ☎23-5852/FAX38-3244(伊勢町12-15)  
メール ashia-tanizakikan@rhythm.ocn.ne.jp

### 【特別展示】永遠なる男と女 ～潤一郎・三度の『源氏物語』口語訳～

- 日時 7月1日(金)まで〈開催中〉※火曜日休館
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 内容 永遠の古典『源氏物語』が成立して、今年で一千年となります。記念の年にふさわしく、谷崎の『源氏物語』口語訳の系譜と谷崎源氏の位置、また谷崎による三度の口語訳の背景と3つの谷崎源氏の関係、他の谷崎作品と『源氏物語』との関係等をテーマに展示

### 【源氏物語千年紀記念特別講座】源氏物語『女君に魅せられて』第1回

- 日時 4月27日(金) 午後2～4時
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 内容 「源氏物語」に描かれた女性をの4つのタイプに分けて講演〈全4回〉。耐える女に魅せられて(藤壺・玉鬘)
- 講師 谷崎潤一郎記念館・たつみ都志副館長
- 会費 2,000円(4回分7,000円)
- 定員 30人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【文学館講座】肥前有田焼《白磁上絵付け》

- 日時 4月21日・5月12日・19日・6月2日・16日(土) 午前10時～正午〈全5回〉
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 内容 肥前有田焼白磁の器(皿・鉢・壺)に、古典または自分のスケッチ等を絵付けし焼き上げ
- 講師 肥前陶芸館主宰・福田一義氏
- 受講料 10,000円(5回分)・材料費別
- 定員 15人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【文学館講座】作家・柳谷郁子氏と楽しむ読書会『おはん』

- 日時 4月26日(木) 午前10時30分～正午
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 内容 柳谷先生と一緒に読書を楽しむ
- 講師 作家・柳谷郁子氏(同人誌「播火」主宰。著書「風の紋章」「夏子の系譜」ほか)
- 会費 2,300円
- 定員 20人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【朗読会】「源氏物語」朗読シリーズ 第4回「末摘花」

- 日時 4月28日(土) 午後1時30分～3時
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 朗読 朗読グループRST・安生直美氏/一花泰子氏
- 会費 1,000円(入館料・ドリンク代を含む)
- 定員 25人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【文学ツアー】『紺碧の海と花・谷崎文学とごちそう』

- 日時 5月18日(金) 午前9時～午後5時
- 内容 淡路島ウェスティンホテルで、たつみ都志の語りで講座を楽しんだ後、ウェスティンのランチ、咲きほこる花々、紺碧の海を満喫してください
- 講師 武庫川女子大教授・たつみ都志氏
- 受講料 12,000円
- 定員 24人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【俳句の吟行】黒川悦子先生と新緑の吟行とお食事会

- 日時 5月19日(土) 午前10時～正午
- 会場 谷崎潤一郎記念館
- 内容 池の面に映る新緑を愛でながらの吟行会。俳句のお話と食事も一緒に
- 講師 ホトトギス同人・黒川悦子氏
- 会費 4,000円
- 定員 22人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

### 【史跡巡りバスツアー】新緑の須磨離宮を訪ねる

- 日時 5月26日(土) 午前9時30分～午後5時
- 内容 皐月(さつき)の季節、須磨あたりの歴史を訪ねます。昼食(舞子ピラ有栖川)
- 講師 西本願寺財務部学芸員・和田秀寿氏
- 参加費 8,000円(食事代を含む)
- 定員 28人
- 申し込み 電話・ファクス・メール等で上記へ

## あしやの民話 ⑩ 魚屋道(ととやみち)



●文・三好美佐子さん  
●絵・竹本 温子さん

昔から、あしやの海は静かで、その沖は遠浅で、魚を獲るのにこの上なくええところやっただんで、江戸時代のころから、地引き網で、イワシがたくさん獲れとった。

腐りやすいイワシは、その日のうちに、民家に売られるが、形の小さいものは煮干しにされた。この煮干しは、「宮じやこ」と呼ばれ、味がよく、宮中に差し上げるほどのもので、獲れ高も多かった。

これらの魚は、あしや浜や打出の浜で獲れ、生きのええ魚が、毎日のように漁船から下ろされた。

昼網というて、昼すぎに地引網が上げられると、浜は急に活気づく。

子どもやカモメが寄ってきて、にぎやかになる。気のいい漁師は、「そらっ。」というて、子

どもの持っているおけや、着物の身上げのところに、とりたての魚を入れてくれる。

カモメも、舟から落ちこぼれる波打ち際の魚に急降下して、獲物をねらう。

船に山積みされた魚は、はかりにかけられて、その日のうちに町に売りに出される。

「とれとれのイワシ、いらんかえー。」

「ててかむととやでえ。」

そういつて、魚売りの声が町に響き、その日の台所をにぎわした。

あしやの浜の魚を待っているのは、あしやの人たちだけやない。温泉の町、有馬の人たちもそうやっただ。

魚売りは、生きのいい魚をちよつとでも早く売りたいと、六甲の山道の険しさもいとわずに運んだ。

自分の背中に、背負えるだけ魚を背負っては、暑い日も寒い日も、せつせと六甲越えをした。

魚売りが通る山道は、いつも同じやっただ。人々は、その道を「トトヤみち」と呼んでいた。漢字で「魚屋道」と書く。

今もその道は残っている。阪神電車の深江駅から六甲山へと上り、有馬へと下っていく道で



ある。

この道を行き来するのには、苦労話がいっぱい残されている。その一つに、こんな話がある。

今もいるかも知れないが、そのころ、オオカミのような野犬が、この山中に多くいた。

野犬はいつもお腹を空かして、人を襲ったり、人の持っている食べ物を襲ったりする。

その中でも、魚売りが、野犬のお目

あてであつたという。野犬は、魚を背負つて険しい山道を、ハア

ハアと息づかいも荒く上がってくる人を見逃さなつた。慣れているとはいえ、魚売りの命がけであつた。「ウウー」と牙を出して襲ってくる野犬に、魚売りは背中に手を回し、背負っている魚を自分より遠いところへ投げる。そして、懸命に走り、少しでも犬との距離を離して逃げるのだ。

野犬は、投げられた魚に、脱兎のごとく飛び

つのである。食べてしまえば、また魚売りを追ってくる。

たいていは、これで人間の勝ちになるが、この繰り返しは、結構大変なのだ。犬が一匹だといいが、何匹も寄ってくるとうはいかず、持っている魚を全部投げ出して逃げることもあつたそう。魚も大事だが、命には代えられんからや。

また、襲ってくるのが、犬だけでなく、ヘビやカラスまでもきたそう。

どうして、この道ばかりを人は通るのだろう。何かに襲われた時、ほかの人がそばにいと心強かつたからだろうか。

いろいろと苦労があつても、半日で魚が運べるといふこともあつて、この道は、ずいぶん長く、人と魚が通る道であつたようだ。

今も、打出の浜では漁船で漁が続いている。船曳き網を中心に、イカナゴ・シラス・アジ・イワシなどが獲れるという。

芦屋でただ一軒、今も漁船を出している船長さんに聞いてみた。

「本当に、獲られたその魚、私たちの口に入っているんですか。」

いろいろな思いで、そう聞いた。「ハッハッハ。海は広いですよ。どうですかね。」と、返ってきた。まっ黒に日焼けした船長さんは、まさに海の男であつた。

あしやの海は、ほとんど埋め立てられている。昔のあしやの浜は、もう見られないのである。いや、人の心に生き続けている。

青い松林、白い砂浜、銀色の魚がおどる沖、数々の船が行き交う姿として……

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。

#### ※注

前回の「月若丸と藤栄」のお話では、北条時頼を前の將軍として登場させていました。しかし、歴史上の時頼は執権という職であり、將軍を補佐し政務を統括した最高の位の人でした。時頼は後に最明寺入道として諸国を巡り、民情視察の旅に出たといわれています。